



3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

仁  
1303  
19止

日用心法鈔五編隨筆 中

耳の垢あうよ。諺ことゑふいとく。粉糖ことう三合さんごう呵がきだ。養子やうし小行こうぎょうべからず。心配しんばいをかりふ者ものて。何なにまう。面白おもしろからずといふ人ひとあり。是ハかやうふ事をりふ人の何なにまう也。何なにあつても。苦勞くらう心配しんばいハせ。福ふくをあらぬとあるべ。先さき自分の力ちからよ。新たふ見世みよを出だす。家業けぎょうふ取とりかう。やつて見るべ。中なかく骨ほねの折きたる者もの也。何なにでも寝ねす。小勵えいく。不ふどふせ承うけ。一軒いつかんの家いえハ取とり立たてがう。中なかく急きゅうく。小こい參まいりがた。年と経へて見み承うけ。功ごハ見みへぬ者もの也。此こ家業けぎょうまで。渡とせう成なと見み定さだめる迄までハ。廿そ年ねん也。其中うち

のあんぎ苦勞中ことぞふハ。のべがた一はかん  
あん苦勞をむるよりハ。養子ふ行かどよきハ。あき  
とあるべ。身上戦取立る若者もよくあき。養  
子ふ行たる方り。何などよきもあきがた。其上より  
も道具も得意場も何き。何など。つよみりあき  
がた。よろこんで豈家を。繁昌するやう。あすべ。  
一切の事。ニウちふよき事ハあき者也。何事ふよら  
ず。一ツよけき。一ツヨロ。此世ハうき世とりて。う  
き事をかり。何世の中也。貴賤上下老若男女より  
らず。苦のあき者ハ一人もあ。下賤の者よりも。高

貴の臣方と上小立入など。尚く臣苦勞多一とある  
へ。是ハ上の人とありて見い。又平入ハ養子ふ行也。新  
規ふ家を取立る。又ハ何り来りの家業をする也。  
千辛万苦ハ何る苦とありて。人の家業をよくつ  
ともべ。

○叔新規ふ家を取立る事ハ。何かとの入用りあきが  
たり。家藏を作り。一世帶の道具を求め。家業の元本  
金から。何やかやふてハ。中大入用。相應ふ家業の出  
来るやうふするハ。千辛万苦骨のわたる者也。粉糖  
三合のき。養子ふ行べからず。おといふ人ハ。一刻の

家を取立るの六ヶ敷事を考らぬ人のいふ事也。智考  
る入考へべく

○叔若養子小行事のちば。養父母の家を大事ふを  
べ。我取立たる家あきを。すいびさせらせ何より  
笑ふ人も少ふかるべ。若養家を走いびさせてハ。  
相濟不ヤ。こきふよりて何かふも。身をよくおさめ。  
家業を出精あて。元よりも繁昌ふあるやうふす  
べ。叔又養家の娘女房を大切ふすべ。養家の娘  
ふハ。一目も二目も置てふらすべ。何事も女房と  
お候よきふ斗ふべ。若又何より愚鈍ふきむ相談

くるよも及ばぬ。只大切ふあて。中よく暮すべ。又妾  
けぐるい。女房へ杯ひ。交あて行べからず。唯内の女  
房計り守り居るべ。よく考へて見るべ。男と生き  
たらむ。此女猪を相續べ。我併一をいくらさん若を。  
れる小女小生きたれを。表向の用事がつとまらぬが。  
養子を貰ひ。夫トあて。敬ひ仰やまりてくらすハ。心よくも  
何るべからず。立ち取へき身猪を。人ふやり。其上小外  
の女ふ。ひきかけ。立きを麻糸ふききてハムよき。心悪  
き。女の身ふも立てて見るべ。色情の事ふはらす。  
損徳の事もかりふあらじ心持のそろき事。いふをか

イあらん。推察すべし。たとひ身緒のよいふの子息を  
貰ひ。持參金を持て来た男ても。女狂ひ杯ハ慎むべき  
事也。いよんや貪乏人の子息。又ハ家の手代余所の畠  
頭杯の養子ふ来るハ。第一ふ養家の娘め女房を大切  
不守り。余所外の女ふハ少一も。心をかくべからず。是  
ハ急度第一ふたーふむべし。女の身ふあ内てえる  
べし。第二ふ家業を出精あて。家をよく齊ふべし。尔  
るよ多くの養子を見るふ。父母達も余終あひて。我  
侵ふあると。養父母の大恩おんを卫すき。女房を麻走そよニ  
志おもて。女房めうゆき。又ハ妾てつの所へ。女房めうゆき。後より早く

隠居ひきょあて。養家の娘め内儀ないぎを捨て。妾めうとくらす人を數  
人たも見たり。尤納得よのぞふても何なにろ小けきとも。本意ほんいつ小肖  
きて。冥加めいが仰あかすべし。たとひ女房めうハ。機樂きらを好み  
隠居ひきょせる。足跡あしきハ残のこりて。身をよく打堅うちごめて子  
孫まごふゆづるやうふすへし。養家の末繁昌まごんじょうを計くゑし。  
又外ほかの女めへ手てを出だし。妾めうを持もハ急度きゆど慎つつむべし。  
我仕歩あしゆしたる身上じじようでも。女房めう通とおひ妾めう狂きうひするハ。急  
度きゆどたトふむべき事也。いよんや人の身緒みじゆを貰うひし。  
入いハ猶更よしよの事こととあるべし。家の娘めうを大切たいせつふむるハ。  
娘めうも親おやも親類おやびも悦えひで。三方四方さんぽうの和合わごふむる。身緒みじゆ

のよくある基ひ也。此道理ふ召遠ひハ仰るべからず。家の娘をひいきあて。つよふ所らす。つまる所ハ養子の入も安恭ふあて。威勢よし。考入り。若又本妻を棄未ふ思ひ。本妻を嫌ひて。妾を愛ひ。又ハ妾と隠居するあら。養家を。元のまわりて出で一文も養家の損の立ぬやうふあて。妾狂ひをすべし。養家の福徳金銀を以て。妾狂ひハ大惡無道也。養家の物を盗むふ所たる。少も道をあり。義理を弁へたる人ハせざる所也。唯人道をあらざる。大猫同前の者。不義を走るあり。何よりいひ過のやうあきせ。本義を礼せば。

爰等ふも仰ぐるへし。夫、共智者達の評を待つ是も一がいふも。いひかげき也。本意ハかくのごと。尤家の娘も。我僕筆作がゆつて。よろ一からざる事もあるべし。然きとも先ハ男の方ふ多く毎往がゆるところべし。男の方ふ無理さへあけき也。たとひ養子たり。女の方ゆり。ころきを取ひてぐふ。何の事らぬらん。心安き事也。女房よりハ何かどころき男でも。取も一ざがたし。女ハ大ひふ損失の何る者ふきを。男の方から機を付て。毎理のあきやうすべし。甥いとこ下贱貧乏入が。よい抹家督を貰ひなから。其

養家の娘を。龜末ふ考く人を幾人も見たり。こきふよりて。養家の娘の心汲取て。此事をかき置者也。一切の養子たる者。此道理をよく弁へ。養父母娘の关心するやうか走べ。さすきを上下和合志て。家も増く繁昌すべし。何でも第一養父母小孝行を尽しよくても。くるくても。父母の活意ふ隨ふべし。第二養家の娘を大切ふすべし。養家の娘を大切ふせむ。養家の父母ハ喰院ひきふらん。父母の悦ひハ。天の悦ひ也。天の思名ふ。叶ひて。養子の身の上。何一とき事ハ仰るべからず。第三ふハ身をよくおさめ。家業を出替ひて。養家

の身上えんじゆうをよくすべし。又養家の娘を龜末にせぬ人。あらぞ。身上ハ可るくせぬ人也。世百の養子たる人。此一段をよく考へて。何やよりあきやうふすべし。世百を見るふ。養父母の仰る内ハ。父母達ふ遠慮も何て。ある人多し。智者の道向る人ハ。せざる所也。若すきぞ天罰を蒙りて。行まつゝとあるべし。

○我杖上じょう丁女ハ夫トを左あきてハ。家あけきぞ。夫トを大切ふすべき事ハ勿論也。又夫トハ女房を仰せきて。

中よく暮すべし。又大切ある親を預ける者あきだ。  
心よくつとまるやうふすべし。又女ハ疑ひふかき者あ  
きだ。先夫トの身を正しくして、疑かヨ奴やうふすべし。  
疑かせざる時ハ。女の心おのづから。走ゑある者也。  
かくのごとくあきだ。夫婦の間和合考て。家内ハよ  
くあさまる者也。又女の色ふ乱キハ。急度いまあむへ  
1. 女ハ智惠のくらきが常也。身ふ何やよりあきやう  
ふ。教ゆるが肝要あり。智惠くらき故ふ。衣服拭身ミ  
リ。おこりを好む者也。是をいま考むべし。愛ふおぶ  
きて。乱きあきやうふすべし。又夫トの身を正しく守る

時ハ。是より家ハ整ひて。繁昌する者也。夫トの身持  
を悪发志て。本より愚クある女也。不義の者ふぞる  
類ひ多一。甚ざあげかせざき事也。恐き慎むべきハ  
夫トの身持也。夫トの身持さへよけをだ。女のんほ遠ひ至  
取か一ぐふほの事うちらん。煎餅をかむよりも心あか  
るべし。

○同上丁老人のい豆く。世間を見るふ。一人娘ふ入婿を  
取て家を相續せる事。甚ざ六ヶ敷者也。是等ハ兼て心  
得れるべき事也。先名跡ふせんと思ふ。嫡子娘ハ幼少  
の時より。仕入が甚だ大事也。其仕入といふハ七ツ八ツの時

より。急度氣隨氣修をさせず。常くひきかすべし  
ハ。其方ハ女といへとも。此名跡を継承をあらぬ身也。然  
るみ女ハ。たとひ名跡とあつても。表をつとむる事かあ  
らず。此故ふ男子を貰ひ。婿とあて。其人を以て名跡  
と見る也。是則ち其方を名跡と見るといふ者あり。女ハ  
何事ふも。夫トふ隨ひうやまいて。身を慎み。少一も我  
了簡を用ひずくらす。女の道あり。女ハ内をおさめ。  
夫ハ外をおさむる者也。畢竟をいはく。夫婦ハ則ち二  
身みて一体也。男ハ面てよう。下前通りのごとく。女ハ  
もとさうりよ。下脊<sup>さき</sup>通りのごとく。さきを男一人ふ

ても。女子人ふても。獨り身あるハ。一身全たがらぬ<sup>アリ</sup>ニ  
とし。然きを夫婦不和合の時ハ。中風病と同一事ふ  
て。終<sup>ス</sup>ふ身を持つ事あらぬ者也。此不和合ハ。脊中の女  
ゲ。表の目口の指<sup>サシ</sup>番みそむき<sup>ムキ</sup>てハ。不順あり。ときむづ  
儀<sup>ギ</sup>を能く<sup>シ</sup>キ<sup>ム</sup>へて。女ハ柔和おもて身を貞<sup>タチ</sup>あく致<sup>ス</sup>。夫  
を。神<sup>カミ</sup>也佛<sup>ボク</sup>也一筋<sup>ヒヨウ</sup>ふ頬<sup>タツ</sup>にて。身を打仕すべし。かくのこ  
とくふきて。他念あけきむ。則ち父母への孝行也。其中み  
こもるぞと。く色<sup>ムラ</sup>くも。常ふよくひきかすべし  
○叔子息を貰ひて。是を取扱ふふハ。先父母の心也。甚  
大事也。かゆて娘ふいひきかせ——所と。父母の子息

何らいと。少一も相違りては。必ず不和合がある者也。此所ふ心ぬ遠ひが何にてハ。不相續の基ひとある。夫をいかよといふ。子息を貰ひ初めみ。先客がんの年代余めとりみて契約。二三年も差せまく。年代無み者て。つうひ。よくと其人柄を心見る事あり。是ハさむあるべき事也。然どは。爰ふ大事の心に何。たゞひ年代並み者て。試る甚。取扱ひを。年代同前ふまるハ。甚ど何やまく也。子息ふまる者ハ。始めより取扱ハ。子息のごとくすべき事也。先父母より者て。子息を重んト。娘なりも厚く愛。娘ふハか祐てひひきかせーごと

く。別處で大切仕へきすべー。父母よりも。むすこの何一らへ重けきだ。いりある娘はても。夫トと和順あゝ者也。然るふ左様あく者て。子息ハ年代小者と一所ふねさせ。夜更みも心を付す。朝夕食事を走るよも。年代並み。下宿みおき。娘ハ寐卧も。産家火煙のあとり。暖ふ来て休ませ。物たべる事。父母の側上寝か居。ことをおのづとの一何がり。子息ハ人人あきだ。何事ふも遠慮ありて。常ふ屈そ。心きひゆ。一と事繁けきを略一奴。女ハ心淺き者故ふ。此様子でハ。ヨキこそ此家の主トと思ひ。あんあく竈將軍とありて。三面の荒神を後

譖あやーて。おやろ篇きぎを引ひ提まて大音声だいおんせいをゆぐるやう  
ふある者也。又子息こハ娘むすめと遠とおひ。身みかるき者ひとも。何  
ららいをよくあてさへ。血氣けつきみをやり。心こころうつり安いたき  
者ひと多多く。尔そるを麻ま木きふみひ。一いちふねねふ。少すくない。堪忍かんにんつよ  
き子息こも。辟ひがそてむむねねるく思おもひ。已既こぬぬう二合にごうあ  
らば。かやうかやうあ事をこと見る事ことも仰のぞるまトときときふと。いか  
ううの心こころを起おき。暇ひまを取とる。さもあけあけを。義よく志し  
ひ顔おもてをあて。錢金せんきんを歩ある。いつき家のいえごき残のこお  
こす者ひと也。是偏ひどふ親おやの不ふん心こころもあて。遠とおき慮おもひりあき  
所ところ也。何なにたら娘むすめを恐おそろおそろおそき山さんの神じんを致さな。惜惜き子息こ

を貪びん乏がう神じんふするハ。親おやの心こころ一いつつあり。眞ま實じつ小娘こむすめを可  
愛あいと思おも。子息この心こころふひふひくくあく。善人よしなるやう  
ふ取う极きわふべ。娘むすめの身みの上うを打う仕しせて。頬ほを置おきハ子息こ也。其  
子息こ惡あく女めあらば。娘むすめも流浪るろうし。いりある難儀なんぎをせん  
もをかりかりがた。能うく工夫こうするべき事こと也。かくひだ。  
世よの中なかの養子むすめ子息こたる人ひと。是これをあくく聞きあーて。身  
を高たかぶり。我慢我まんの意地いぢを挿さをさまま。大苦おほ遠とおひとい  
ふべ。是これハ養父むすめ母めたるひとの人のひとの心こころをすままでままで  
事ことありあり。老人おじいのいききーありありとと。大き大きふ此  
道理ぢのうりきき。娘むすめの父母おや達たちハ。養子むすめもすこを重おもく取う

扱ふべし。さすきを自然と和合あて。家も繁昌するべし。

○老人の云。世又人の養子とある身ハ。至て大切の事也。我子あき故ふ。他人の子を貰ひて。我子へきる事あきを。親子の間甚た義理厚也。こきふよりて。養子を義子とひよ。何故か養子残義子といふあきを天地の写か。眞実の父母とひよ者ハ。唯あ人也。然るふ我父母。心の上で。他人の子ふりたへぬきだ。其興へ時。死一たるが如し。他人の方へ始めて行一時ハ。又其家へ生きたるがごとし。本の父母のま前みてハ凡し。

今之の父母の方へ生き出たきを。今之の父母の外ふ親とひよ者あト。是を義子とひよ。此義をよく守るとひよ事也。たとひ養父母の家貧しく甚。又ハ心立悪多あて。いづやうの無理を考へとも少一も恨み不足不思ふべからず。是則ち我父母のあきを事事あさむ。聊も背くべからず。我実の父母よりも其恩義勝きて重し。夫をいづかといふ。世ふ人の多き川て重く体一是を疎そかと思ふ。其恩義至人の中より撰み出さきて。養ふ可かる身とあて。微

塵をかりも。不孝也らバ。天罰ひうでう道きんや。恐るべき事也。扱親ふそむかぬといふあんね遠ひあり。腹の内ふよきハ親の作せふゆも背かぬといふ。心の動き。夫グモふハち背といふ者也。夫をいふふとふ。若肖かぬといふ心が何ると。万事ふ肖かぬ立をあて。親の面前みても不調顔をあて。我ハ商ひハよくする。金銀ハを口ず杯とり下底意がわるから。思ひぞぞひに色ふぞきて。親の心を勞むる事あり。父母達ハ何とある。氣をいこめてござる。左扱ふ子息を親ふ肖かぬ人といふべきや。商賣をよくする。金錢をそ己姪の

実体ふとりふハ。考きたすふあて。足弱る者。涉汲をたべるふどめ者ハ。為うちの事也。自慢ふ思ふ事か。実ふ肖かぬといふハ。唯親達の少一も心勞あく。心すゝ思ひりか候よすべ。常々きりけんをうかび。徒然く兄弟の時ハ。序機ふ合やうふすべ。眞実のもすこでさへ壯年安んじゆふやうふすべ。眞実のもすこでさへ壯年ふあきぞ。おのづから。親も遠慮する者あり。乞き何ふと心を尽し。つともる。凡夫の事乞を。行届かぬ事も多かるべ。せめて此方よりみぢんも。隔心なきやうふ致へたと。心を尽せば。さすきを親の

心もいつとあく。隔心さやくあんもあくありて。大ひふ心よ。大  
とひの一き事あくな。小兒せうふを呵えるやうあ。呵らまる事  
も何なる者わ也。其時思ふべー。是ハひとへム。心安く男ひ  
めふ考かるーの。何なら立たると。ありカたく思ひ。猶ゆ  
身みを慎つつみ。親おの薄心はくじ。順じゆひ他念ほかねん。大切だいすく  
かやうあたる人ひとを。眞實しんじの義子ぎしとりあり。養子ようし  
たる者わ。かくくになて。養父母ようぶつふ事ことふる。道みち也。若わ久  
遠ちがひかりうて。養家ようかの富鏡ふきょうを目當めあてと志おもて。金銀きんぎんか  
ささ。養子ようしとありなぞ。養父母ようぶつを大切だいみもて。長命ちやうめい  
ああくやうふと。いふ心こころハあくくて。明暮あけぐれ養父母ようぶつグ早はく

死しくるやうふと思ふべー。左次さくじふ男おハ。第一の不義不孝  
なり。其そやうあ心こころにふてハ。其家そのへ養子ようしふきたとりふ者  
ふあららず。其家そのの金銀財寶きんぎんざいぼうを取とみくたとりふ者  
ふーて。惡心おこのある。いやふ養子ようしなり。家相續いへきうちぞくのためふ  
來きたとハいひがたー。養父母ようぶつふ仕つかへ奉たまつる為ふ來き  
といひがたー。金銀財寶きんぎんざいぼう計けいりを取とりふ來きる不孝  
不義者ひぎしゃとりべー。世よの養子ようし達たち必ひむく。不孝不義  
者ふふらぬやうふすベーと。老入おとなの養子ようし達たち。此道理ぢぢ然なりと  
何なり。むもある教誠きょうせいあり。世よの養子ようし達たち。此道理ぢぢ然なりと  
ありて。親孝行おやしゆうぎょうを勇いさ一とあて。養父母ようぶつ達たちのの壽命じゅめい

長きやうふと。祈るべし。又何ふど無理をいひ玉す  
とも。善惡是非をかへり見す。豎り横でも。父母の心  
ふ従ひ仕へ奉るべし。是が則ち一切子たる者の道  
あり。かやうふくらむて。父母ふ仕へある。天禄を得て行  
未繁昌あるべし。

○老人のえ。子息を他家へ養子ふせむ事。甚だ大切  
あり。其子ふ心に遠ひがありてハ。他家を傍山といふ  
者あり。其父母たる人々ハ。能く心地あるべし。男女皆  
ふ子を他人に走らすよハ。先方の勝手のよもやうふ  
すべし。其父母ふよく孝行を致し。よく仕へるやう

ふ教へて走らすべし。其養子ふ行い者ハ。里方の父  
母を始め。兄弟一家林ふ。心を用ひ大切に致し。養父  
母の一家親類を。龐末ふせる事無き也。甚た見苦  
者ふあひて。よろ一からず。此段いづきの親達も養  
子ふやり。嫁ふを立す子ふハ。此所を能くいひきかせ  
て走らすべし。叔其いひきかせやうハ。男女共ふ。養子  
ふゆき。嫁ふゆきたる時より。最早此方の子ふてハあ  
し。然きを。は後ハ其方が頼む方とてハ。養父母也あう  
とあうとめ也。是が眞実の親といふ者也。且き其方を  
他入ふ渡し。養育あて貰ふあり。子を養育する人

を。實の父母といふ者也。さきぞ其方ハ。我方がゐて死死したるがごとー。向むかの家へハ。生きたるがごとー。此故自今以い後我を親と男おとこべからず。我さへかくのごとくあきを。いりんや兄弟一家とても。我方ハ。其方の味方ふららずとあるべー。人の所ところへ行ゆきたる子ハ。唯偏まんべん小養父母を。眞實の父母と思ひ。女あらす。あうとあうとめを眞實の父母と思ひ。孝行をせよ。又此方の佛曰ふハ。精進きゅうしんあるふ及およむ。其家の先祖精靈方の精進さへ。大切ふをきを。我方の精進ハ。其内ふこもるとあるべー。天道ハ慈悲ある者也。養父母あうとあう

ためか孝行を尽つくし。又折かしハ里さとへかへりて。里本の親ふも。孝を尽つくせとあらむ。つとまらぬ事もあるべ。爾そるふ。而じの養父母。舅姑おじごめふさへ。能孝よしを尽つくせ。里方の親の心ふも叶かなひて。両方の孝行が調とふとハ叔おとくありかたき事也。何卒養父母あうとあうとめ方の。序心ふ叶かなふやう。小走こしべー。さすきを。里方の父母へも孝行とある也。又益正の礼をつともる。先養家の存生の親達ハ。りふふ及およむ。諸先祖の位牌いわい。且那寺たうな墓所ぼくしょへ參まいるべー。其後寺透てきとうもあらす。里方の親達。寺透てきとう。祖等そとう參まいるべー。若いとまあき時ハ。里方の分ぶんハ参まいら

すちふる一からず。万事、向ふの事を大功小致し。養父母あうとあうとめの指図ふ隨ひ。自分の子簡を丟すべからずといひきかせ。熟と得心させて坐ハすべし。叔里方の親達ふ。心ねあく。教へあき人の子ハ。男女が心ね遠ひの所ありて。貰ひたる方ふて。大ひふこゆる事ある者也。こきふよりて。里方の親達。能く教へいひきかせて坐へし。叔又里方の親達ハ。子息娘ふいひきかせく通りふ遠きぬやう不才べし。先弟一里方の親達ハ。心小少しも強きを待べからず。又呻ふをせむる心を待べからず。其の母

若里方の親兄弟ふ。強みを持。呻ふをせむる心入り。何らぞ。いつき不和ふあて。出戻り者也。里方ハ何かふも。理をいきず。先方の仰せふ隨ひ。まけてくらすへし。左揆致さぬと。子息も娘も機う強くありて。辛抱の出來ぬ基ひとある。大ひある禍ひあり。出戻りとあきを。親達も苦勞多し。子息娘ハ。天禄を落して。いづきよろしくからず。こきふよつて。里方の強きと。呻ふを責る心ハあきがよ一と考るべし。考へき

親よりあて。養父母あうと姑を急度うやまい。心持

も子の父母ふ順ふ心ふありて。万のつとめ方。怠たら  
べからず。兎も角も。子供の世話ハ。我がせ称ぞあらぬ  
筈おなふき也。夫を我ふかうりて。世話下さるきぞ其苦  
勞らを思ひおりて。いろあども。向むかの親達を大切ふ致さし。  
少すこいも不足の心あく。里方の親おやぢから。草くさくつとめ  
て、見すきを。へりある子供ふても。夫ふ習ならひて。親達ふ  
よく孝行を致さし。何事ふよく順さひて。家内うち和合  
する者也。是ハ國くにく家いえくふよく順さひて。事ことふきを。他  
入いれ子供こどもをきそす所ところの。秘術ひじゆをある。一ひと志し者もの也。親おやぢ  
達此儀ぎをよくし。子供の為ため親おやぢく達たまの為ため世よ上の

為ためふすべーとあり。是よき教かへあり。此事ハ世間お  
一ひとあべてある事ことふきを。相應ふ暮くらす人ひとハ。急度きつと  
以置おきべー。又世間へ出でて。口くちでも利入きりいりハ。入聟嫁入いりむすびする。  
養子やうし子息こむすこ娘むすめのん始はじ。又里方の父母おやぢのんを勘かんへおい  
て。我事入わざいりの事ことふ。入用いりようの節せつハ。よろあきふ隨つづひて。取  
捨すてけて用もちひままべー。養子嫁入いりの事ことハ。一世一代の大  
事ことあきぞ。よく勘かんへて。双方和熟わずかあて。家相續いえぞうぞくのよく出  
来るやうふすべー。若よめふゆき。養子ふ行ゆきたらぞ。もうと。もうとめふ  
よく使つかべー。若えあうと達たちヶ余よ人ひとふ勝まさきて。六ろく爰入

たりとも。其人ふよく仕へるを。堪忍辛抱をよくす  
を。孝行の人とソベー。一通りの入ふ仕へるハ。堪忍  
辛抱をあて。よく孝行をする人とソフ者ふ何らず。  
あたりまへあり。其六ケ無い人よ。よく仕へよく孝  
行するを。よき養子。よきよめといふ。此道理をよく  
志りて。六ケ無いもうとよ。よく仕へ。よく孝行すると。不  
めの六ケ無いもうとよ。よく仕へ。世の人が。  
方ハよき入とあるべし。十目の視所十手の指さす所。  
其嚴あるかあり。古語ふて考ふべー

○良齊先生の間話ふ云。父慈よ舅姑め順ふ。して家内和睦  
せるハ。誰もよく来る所ふ考ス。弥月からず。無理  
ある舅姑ふ能事。へる故ふ。孝子良婦とソフなり舅  
姑父兄無理ありとて。互ひよ長短をいひ善惡を争  
ふハ。入倫も五常もいらざるべし。宋の仁宗皇帝  
母后と。少く不和の事有り。仁宗怒りて。韓魏公又加  
たがゆへ。魏公のいそく。古への舜帝ハ。心悪爰父母  
ふよイ孝を尽し。ひ一故ふ。万世延。大孝行の人と  
あめらき。舜帝のミ孝子よ。天下の人ハ。皆不  
孝ふても何るまじ。父母慈愛のよき人あらバ。其孝

ハ知きざるあり。不慈の無理ふ親ふ。よく誠を尼志  
て。事ふること孝道ありといへむ。仁宗皇帝も感一五  
ひて。夫より母の長短無理ふかまどすと。孝を盡し  
故ふ。母も大ひふよくありり。母子の間睦まトく  
ありゆひーとあり。此道理より見る時ハ。何ふど心ゆ  
き。父母あうとあうとめでも。子の方より。誠の孝行  
を尽す。よくありゆ事疑ひあ。何ふ小も子の  
方より。父母あうと等の是非善惡を見ず。孝行を教  
をべ。誠の孝行人ふ於てハ。善惡是非の渉汰ふ。  
只父母連々隨ふのをと。天下の母子不和ある時ハ天

下の大災ひあり。然るふ韓魏といふ忠信義士の賢  
人ありて。よいすをやへ上けられ。誠の孝道小  
趣きゆひ。母子むつまぶくありゆひー。天下中の  
人へ。孝道を教へゆ。ところ者ふ志て。天下中の人の  
幸福也。大功德あり。是仁宗皇帝。よき教を受ゆ  
故の事也。ときふよりて。よき教へ聞べ。知らす  
九八物やうり。○歌誄百人選茅十。法眼不角の句ふ  
○けむくとも。後ふ癡やもき。蚊をかあ  
是ハ不トの門入。立羽千翁とて。誹諧の宗匠あり。を

せ戎の會席へも出らき。祐華せらき。不角流と  
て。名高き能諧師。よそ。法眼ふあらき一人あり。以  
入子供十人あり。皆男子ふあて。若頬を不益といひ  
二男を壽角。三男を辰角といひ。此三男を芝からくノ  
け町五町目。小川屋平八といひる入の所へ。聟ふせば  
けるふ先の両親甚だ六ヶ發入ふて。辰角居りよぐ  
みて。帰り一時父不角此發句を。辰角ふせハセーふ  
辰角是を見て。又かくらけ町へ立帰り。辛抱ゑて  
勤め一かば。其後ハ何事もあくて繁昌也。其内小両  
親も色行をひ我も年老いたきを。片毛勝五郎不

世を渡し。我ハ高輪へ隠居致し。能諧をたのむ  
暮一けり。此蚊モトの一句よて立帰り。目生後終  
りを遂一ハ。いみ一く覺へ侍るとゆり。是蚊モト  
のよき教ふよにて。堪忍辛抱をあて。居りふくき  
所ふ居たり一徳也。是ハ辰角の事をかりと思ふべ  
からば。人の身の上ふある事也。兔角堪忍辛抱  
をあて。末の大福徳安心をねべし。尾やけ猿の淺智  
惠をあて。あそこへもとひこへもとんで。まはつ  
まらぬ者とあにて。世間の人ふ笑ハきよふ。此蚊モ  
トの句ハ聟嫁の衆中ハ勿論。一切の人々へもよき

教訓の發句也。入へ此道理ふよらざんむ。出世ハ生來  
がたゞとあるべー。此けもくち後ハ麻あき蚊をかま  
の心をよくありて。心ふ叶ひぬ事も。互ひふ堪忍ふ。堪  
忍をみてくらさゆを。上下皆福徳安心よハ至り  
か大川。此道理をよく志川て。いろある難儀の所も。  
堪忍辛抱をみて。後ハ麻安きの勝利を志るべー。是  
を志る人ハ。智者の出世志る人也。是を志らざる人ハ  
生世ハ出來かたゞ。愚者の貪乏人と志るべー。又養父  
母志うと志うとめふ。蚊きりのけむりも志い。手  
前の身がいき。身勝手を思ひて。我方よりけむり

を出して。我けむりふ苦む人。世間ふ去ふ。けむ  
りハゆふ斗りふ何りと思ふべからば。我身ふもけ  
むり仰りて。先の親達ふも。けむりをかけ。我身ふ  
ふすがらせ入多し。是等ハ人のよきを志らず。我  
身のヨロキを志らぬ。愚鈍無智の入もヨロキを。一  
がいふ養父母志うと志うとめふ。けむりと  
男小べからず。聟嫁ふも不孝不義のけむりもあり。  
又身がよりおじりて。身上持のヨロキ。けむりもあ  
り。是を甚だ難儀ふ思ひて。養父母志うとの方で  
も。蚊を焚て。聟嫁を苦志まする事あり。尤道理

る子也。聟嫁ハ。養父母あうと達ハ。たとへ何やうか。毎理所リとも。其是非をい可ズ。辛抱堪忍をもて。よく孝行をるべ。よき聟よき嫁といふ也。是ハ天地自然の道理もあて。聟嫁の通るべき道也。

○又先の両親甚ざ六ヶ友人とのき。両親計り見るいと定めかたし。養子よもくるい事らゆる故。両親が六ヶ友いひ五人も考きがたし。家業不精とく。又ハ身持不埒とく。又ハ身手よりおごり過た。立から見ても。横から見ても。身上仕舞の入を見へる故。やかましくいふ事もゐるべー一がい

小養父母計り。六ヶ志いともいひがたし。又何よりぞろくもあく。大駢の入あらぞ互ひ不堪忍をもて。中よく暮すがゆたりまへあり。其やうふよい親もあく。又其候ふよい聟も嫁もあい者也。是ふよつて。互ひ小堪忍。又聟君をあて暮すべし。又養子嫁の方ハ。子ふもせふもまけてくらさばあらぬ者也。まけてくらすが道あり。又ほけてくらすか。安心福徳所リ。親ふまけ私ぞ子といひがたし。孝といふ字ハ。親ふ隨ふといふ字也。若親ふあたかござきを。不孝不義の入ふあて。人間仲百ふねらず畜

生仲間也

○入心ふ叶ニ奴事ぞかりあき。夫をこらへてくら  
さ孙をあらぬ者也。辛抱堪忍をあてくらすと。一切  
の事が成就するあり。若望之事あらば。堪忍  
辛抱をあてくらすべし。心は叶ニ奴事をこらへてく  
らせ。一切福德の来る根本也。又身分不相應の願  
ひをあて。夫り叶ニ奴と不仕合也といふ。是ハ已き  
身分あらず。無智作病也。身分不相應の願ひさ  
へせ。孙を何とも不仕合の身あらす。身分相應  
の福德ハ何りともるべし。不自由の中ふ樂をあり。

自由自在を勧と直ふ。不自由苦勞グ起る。自由ハ不自  
由の本どり。諺ふてもよくあるべし。是よりて。ね  
事ハ足ぬがち不自由がちをよーと思ふべし。福德安  
心の来る道也。若心の役ふ自由自在をせず。身ハ亡ふ  
るとあるべし。是をよくいゆ

○歌詠百人選廿六 獨歩庵超波

超波ハ貞徳の門入ふ。平砂の兄弟也。俳諧の上  
手小考て。尤秀逸の句多一。○西行ハ弓矢取身の案山  
哉。○荒海へ船から投る冰哉と。此外秀吟數多何りと

いへとも。紙かさあきを。もち一侍る。病中の吟ハ  
 長病の耳がよくなる角力取と門人執筆紙蒸辞  
 世ハ。いきよと聞一。我已が辭世ハ。先年案せ一。荒濱  
 氷を投るの句。是よき辭世ありといひ終て。息た  
 へたり。夫故ふ石牌ふも。辭世と考て荒濱の句。り。  
 超波の趣向ハ。船ふ水の入て氷とあり。を。又海へ  
 あげこむが。元の水とあきり。人と生きて。又  
 元の水ふ戻りけるとなり。元へ戻るとハ。死の道  
 也。故ふ是を辞世と考て。此外ふ句ふ一といへり。  
 松は蜻蛉の句ハ。巣で外へ行やうでも。又元の所へ帰

りて止まるハ。蜻蛉の常也。是ハ人情ふよく通  
 たる句と覺へたり。たとへハ一軒の主トたり也。又ハ  
 奉公人たり也。爰ハ商ひふ一よろ一からずと。脇  
 へ引越し。爰ハよからんと思へども。まさう其所小住  
 で見きた。是ハよい所とひよ叶ふ所。何國へ  
 行ても。我身ふそあ已りたるふどあらてハ。ゆた  
 収者也。意外入ハ。何所へ行ても意外入あり。奉公人  
 も夫と同一事也。爰ハつとめふくーと。主人を取か  
 へく考ても。同一事也。何國へ行てもつとめがた。  
 又元の所へ帰る事何る者也。爰計り日ハ照ぬと。人

口くせふよくりふ者也。左板ふ事をりふ者ハ。一生  
尾テグすからずにて。貪リニギかんぎする者也。主シよもせ  
よ。奉公入アラムよもせよ。身を動かすたび事又金銀カネヲ掛  
りて。段ダニと微ヒろくをる者也。心ふ叶ハシば枝ハシ。同ト所ハシ  
居ハシき。段ダニと馴染アドミも少タキ未タキて。人もありおのづから商  
ひも。繁昌アシナシする者也。奉公入アラムハ猶アモ更シラの事。主人をたゞ  
くかゆき。いづき新アラミ參アラミとあり。今世ハあらざる  
て。金銀カネをつくり損ハシをする者也。鬼角カツガ龜直カツガートてあ  
元モトの枝ハシ取付アラフて居ハシるが勝ハシ也。古歌  
○爰アマもうしかトトも仰アマーと嫌キラふよ。何アマも同アマ一秋アマの夕暮アマ

是ぞ堪忍辛抱あくまで。所をかへる人々への。よき  
教訓キテルあるべし。此とんどうの發句ハフクより見る時ハ。嫁アマて  
も養子アラシても。奉公入アラムても。町人シロでも。何アマでもかても。夫アマ  
くかよるかど。猶アシナシヨーとあるべし。奉公入アラムハ。主人を  
かへると新アラミ參アラミ者とありて。出世アマもあらず。何アマをむ  
とも。割アマの立アマい方アマへまよるとあるべし。嫁アマも初アラタめ初アラタた  
る所アマえ。や辛抱アラシボウせずにて。其家を出ると。出戻アラシタりと  
名アマ付アマて。大ひふうぬ味アマホを失アマふ事アマ也。いよんや二度  
三度アマとありてハ。大ひふ位アラタ落アラシタて。福德アマを失アマす。  
又よめいり見る。夫アマの家アマよあんくせの何アマる所アマ。

又ハ従子ても有る所へ。由か私をあらぬやうみある者なり。是も一がいふはいひがたけき也。先ハ大方かくのごとし。又始めぞア根ハ。よめのかゝるほど名<sup>ふ</sup>が卫るくあるとあるべし。こきふよりて世間の養子でも嫁<sup>あ</sup>でも。一度嫁入あて來たらぞ。す<sup>ふ</sup>でもす<sup>ふ</sup>でも。かへらぬと心を定め置べし。此家を死場と定めてよくても。外へハ勿かぬ。元の所がよいと心を定めて一生をくらすべし。さすきぞ。未<sup>ま</sup>アハ福德安心<sup>わ</sup>くとあるべし。爰<sup>ミ</sup>計<sup>モ</sup>り日<sup>ビ</sup>ハ照<sup>テ</sup>らぬ<sup>キ</sup>林<sup>モ</sup>と思ふと。身ハおさまらぬ卒<sup>モ</sup>とあるべし。世<sup>モ</sup>の養子

嫁たる者ハ。此事をよく心ねて。一度は家へ未<sup>た</sup>からハ。此家より葬禮<sup>さうまい</sup>ふゆく。卒<sup>モ</sup>望<sup>むね</sup>ありと心を定め。吉凶禍福<sup>きゆく</sup>ふかまはずと。泰然<sup>たいぜん</sup>とあてくらすべし。其内又ハ段<sup>ハ</sup>と安心福德<sup>かくふく</sup>の方へ趣<sup>おほひ</sup>くべし。又舅姑めたる者ハ。一たびよめふ貴<sup>もじら</sup>ひたるからハ。たとひ機<sup>とき</sup>いちらぬ<sup>よ</sup>り也。かへすべからず。此嫁を追出で。又かかるぬ<sup>よ</sup>り也。今の嫁<sup>め</sup>よきとおりて。互<sup>たが</sup>ひふ堪忍<sup>かんりん</sup>也。さすきぞ。一生中<sup>あつ</sup>よく暮<sup>くら</sup>すべし。志らぬ地藏様<sup>ちざうさま</sup>よ<sup>ク</sup>。志りたゑんま様<sup>さま</sup>がよいといふ<sup>よ</sup>をよくあきべし。

是も至極道理ある事あきだ。用べ一

○閻路の提挑燈ふ問て云く。私<sup>ご</sup>が<sup>せ</sup>眞<sup>ま</sup>ハ養子でござりますと。不孝ふて安心<sup>きんしん</sup>が出来ませぬ。是も堪忍<sup>かんりん</sup>おたら。孝行<sup>こうぎょう</sup>ふありませう。答ていよく。夫<sup>おとこ</sup>ハどのやう。不孝かハあらね。てあと<sup>あと</sup>が堪忍<sup>かんりん</sup>の修行<sup>しゆぎょう</sup>に入て。物の道理<sup>ぢのとぢ</sup>をよく合点<sup>うさん</sup>すると。孝行<sup>こうぎょう</sup>又なら称<sup>めい</sup>をありぬ道理也。其訣<sup>そのけつ</sup>ハ人<sup>ひと</sup>ハ万物<sup>おんもの</sup>の靈<sup>まことひ</sup>でニざる。むしの鏡<sup>かみ</sup>が何<sup>なに</sup>きらうある故<sup>ゆゑ</sup>。此方の心の通り<sup>とおり</sup>。向ふの心ふうつります。たとへぞ鏡<sup>かみ</sup>みふゆふやふあ者<sup>もの</sup>也。こあたが。みらはあやきだ。鏡<sup>かみ</sup>みふらんじで

うつり。こあたが笑<sup>えら</sup>ハあやきだ。又笑ふてうつります。思ふ事も。見る事も。此方の通り<sup>とおり</sup>ふうつります。こあとが此身<sup>しじん</sup>躰<sup>だい</sup>を貰<sup>もら</sup>ひあがら。何<sup>なに</sup>がたい<sup>たい</sup>思<sup>ふ</sup>す。養子の身<sup>み</sup>分<sup>ぶん</sup>と志<sup>し</sup>て。此方を不孝<sup>ふこう</sup>とする。此身上<sup>じじょうじん</sup>を他入<sup>ほかに</sup>ふやるハ。惜<sup>か</sup>い物<sup>もの</sup>志<sup>し</sup>や。思<sup>ふ</sup>ハ志<sup>し</sup>やる心<sup>こころ</sup>が。向ふへ立<sup>立ち</sup>よ移<sup>うつ</sup>ります。夫<sup>おとこ</sup>故<sup>ゆゑ</sup>小向<sup>こむか</sup>でも。何<sup>なに</sup>とあく心<sup>こころ</sup>よからず。不孝<sup>ふこう</sup>の事も何<sup>なに</sup>るべ。こきふよつて。こあたが養子<sup>よしむす</sup>。此身上<sup>じじょうじん</sup>をやるハ惜<sup>か</sup>い事<sup>こと</sup>。あやと思<sup>ふ</sup>。他入<sup>ほかに</sup>を取<sup>と</sup>てのけ。真<sup>ま</sup>實<sup>じつ</sup>の我<sup>わ</sup>子<sup>こ</sup>あやと思<sup>ふ</sup>。あやると。向ふからも。真<sup>ま</sup>實<sup>じつ</sup>の親<sup>おや</sup>かやと思<sup>ひ</sup>ます。されど不孝<sup>ふこう</sup>も致<sup>いた</sup>。

一ませぬ。先よく勘へ見るへ。卒と養子をするハ。何の為で何ろふ。手前ふ子もあく。先祖より預けたる家督をうけついで。せ話する人があい故。養子あて。家を立ててもらふのがや。夫をあらすふ。此あんだいを他人ふやるハ。惜い物がや。夫が向ふのむ承の心。十分ふまちくて何る故。夫が向ふのむ承の鏡。もうつりまーて。此家をつかんとて。こまるすハ。あい。天ふ禄あき人ハ。生きぬ杯と。男ふ心が出来ます。此道理をよく合点して。養子を真実。我子志やと思ひ。可愛がら志やき。さすれど。養子も眞実の

親若やと思ひます。心ふ叶已ぬ事も。よく堪忍をさ  
川若やき。朱ふ交ハキを赤くあり。墨ふ交已キバ  
黒くあると。同一事にて。少く立るい人でも。此方の  
仕方ふよつて。自然とよい入ふあり。孝行。又。う  
する。又よく思ひて見さつ若やき。人の苦勞者てそど  
て何げ。若い者を。苦勞もせず。我子。するハ仕  
合。あ草若やござらぬ。尔るをあらす。他人の子  
を貫ふてやめた。此身上を他人ふやるハ。惜いと思  
ハ若やる心ハ。大ひある所やまりあり。向ふ。他人機ハ  
少一もあいよ。此方から他人くとりふて。水をさす

ハ。此方から好<sup>こ</sup>くて、不孝<sup>ふぢやう</sup>あらそとひよ者也。自己の  
行<sup>おこな</sup>ひをかへり見ると。向ふ又無理ハ無い者也。くきく  
も心ふ叶<sup>は</sup>ぬ事ありとても。よく堪忍をあて。くら  
さりあやき。そふ走ると。養子も医<sup>い</sup>く孝行<sup>こうぎょう</sup>となす。そ  
なたも安心<sup>しんじん</sup>あります。狂歌<sup>きょうか</sup>をよそませう。工夫  
さつあやき。

○身体<sup>からだ</sup>をやつて死ると思ふふよ貫<sup>ぬら</sup>た人も又おいてゆく  
養父母<sup>おやしやう</sup>たちも。この提桃燈<sup>さしだらぢん</sup>の教<sup>け</sup>へをよく考<sup>か</sup>て。養  
子<sup>ねづけ</sup>ふは身上<sup>じょうじやう</sup>をやるとして。何より思<sup>おも</sup>ふきせぬやうふ  
す箇<sup>か</sup>一。先祖<sup>せんそ</sup>から預<sup>あつら</sup>うたる家督<sup>けどく</sup>を受<sup>うけ</sup>継<sup>つづ</sup>け。世話<sup>せいわ</sup>

する人<sup>ひと</sup>が無いがふ。養子<sup>ねづけ</sup>をあて。家<sup>いえ</sup>を立て貫<sup>ぬら</sup>山<sup>さん</sup>のちや。  
夫<sup>おとこ</sup>をあらざふ。此<sup>こ</sup>身上<sup>じょうじやう</sup>を他人<sup>ひと</sup>ふやるハ。惜<sup>か</sup>い事<sup>こと</sup>ぞや  
と。恩<sup>おん</sup>ふきせる心<sup>こころ</sup>ハ。甚<sup>し</sup>た<sup>ま</sup>うろ一。此道<sup>じみち</sup>理<sup>り</sup>尤<sup>モ</sup>至<sup>シ</sup>極<sup>き</sup>養<sup>うぶ</sup>父<sup>おや</sup>の心<sup>こころ</sup>とハ大<sup>だい</sup>ちがひ又入<sup>る</sup>の  
苦<sup>くる</sup>勞<sup>ろう</sup>者<sup>しやく</sup>て育<sup>そだ</sup>て受けた若い老<sup>おとこ</sup>を。苦<sup>くる</sup>勞<sup>ろう</sup>もせずふ。我<sup>わ</sup>  
子<sup>こ</sup>ふするハ。大き<sup>め</sup>か仕合<sup>しわ</sup>といふこと<sup>も</sup>是<sup>ぜ</sup>至<sup>シ</sup>極<sup>き</sup>道<sup>じみち</sup>理<sup>り</sup>養<sup>うぶ</sup>  
よくありて。養子<sup>ねづけ</sup>ふ身上<sup>じょうじやう</sup>をやるとして。何よりくや  
むべからず。惜<sup>か</sup>むべからず。又養子<sup>ねづけ</sup>たる老<sup>おとこ</sup>ハ。主従初編<sup>しゆつう</sup>  
の四十丁。養父<sup>おや</sup>の所<sup>ところ</sup>を見て考<sup>かんが</sup>ふべ一

○又實子<sup>じつしやく</sup>ハよい<sup>い</sup>ぐ。養子<sup>ねづけ</sup>ハ已有<sup>い</sup>いと思<sup>おも</sup>ふハ。親達<sup>おやぢやう</sup>の迷<sup>まよ</sup>  
ひあり。併<sup>あわ</sup>一入情<sup>いんじやう</sup>ふきを。左枚<sup>さのまい</sup>ふ思<sup>おも</sup>ふも尤<sup>も</sup>あきども。

若實子のあい時<sup>ハ</sup>。因縁<sup>ハ</sup>る人ふ身上をやるが  
よ。けつちて惜<sup>ハ</sup>からず。先祖<sup>親</sup>よりの預り物  
あきだ。又跡相續<sup>ハ</sup>の人に預るのあや。いつまでも我物  
と思ふて。あまり執心<sup>ハ</sup>すべからず。たとひ又我<sup>ハ</sup>仕  
出<sup>ハ</sup>たる身上ふもせよ。人の金銀<sup>ハ</sup>。我所<sup>へ</sup>客<sup>フ</sup>  
來<sup>タ</sup>たとひ者あきだ。又人の所<sup>へ</sup>客<sup>フ</sup>やるもよ。し。  
おき存命<sup>ハ</sup>の内<sup>ハ</sup>。金銀<sup>の</sup>客人<sup>を</sup>大切<sup>ハ</sup>ふすべ死<sup>ム</sup>  
る時<sup>ハ</sup>。金銀<sup>の</sup>客人<sup>を</sup>執心<sup>ハ</sup>ふく。跡相續<sup>の</sup>人<sup>に</sup>  
西づるべ。歌<sup>フ</sup>

○我とりふちいさき<sup>ハ</sup>捨<sup>テ</sup>見よ。大千世界<sup>ハ</sup>障<sup>ル</sup>考<sup>ム</sup>

○又此身上を他人<sup>フ</sup>やりて死<sup>ム</sup>るハ。殘念<sup>ハ</sup>や。實子  
り切<sup>ハ</sup>らたらよからふ<sup>ハ</sup>。あい<sup>ハ</sup>こまるといふハ愚  
癡<sup>ハ</sup>あり。實子<sup>ハ</sup>が何<sup>ハ</sup>よいやら。至<sup>リ</sup>いやら。其所  
ハあきがた<sup>一</sup>。世間を見る<sup>ハ</sup>。實子故<sup>ハ</sup>身上を  
えまい。うち<sup>ハ</sup>店<sup>へ</sup>引<sup>コ</sup>ミ。飢死寒<sup>へ</sup>死<sup>ム</sup>をあた人<sup>を</sup>  
いくらも見たり。左<sup>シ</sup>きを實子<sup>リ</sup>よいと一<sup>シ</sup>かい  
ふ思<sup>ハ</sup>へからず。又實子<sup>ハ</sup>我<sup>ハ</sup>修<sup>ム</sup>て親<sup>の</sup>いふ事  
を少<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>もきかぬ事<sup>アリ</sup>。養子<sup>ハ</sup>義理<sup>を</sup>弁<sup>シ</sup>ま  
て。親<sup>の</sup>いふ事を<sup>き</sup>かぬといふ事<sup>アリ</sup>。是<sup>ハ</sup>實子  
ハ。養子<sup>より</sup>ころき所<sup>アリ</sup>。養子<sup>ハ</sup>義理<sup>を</sup>考<sup>ム</sup>

へるから。大無理をせぬ。實子ハ義理も何ふも  
勘へず。大無理ありて、親のりふ事も。一家親類の  
りふすも。少一もきぬ子息あり。世の放蕩子  
息を見てあるべし。親ぐく可ず。のまぞ小勵ひて。  
溜たる金銀を。皆ひりつういてある。親ハどちへ  
行ませうと。りふやうふあにて居るよ。少一もかま  
わず。まくく金銀をつくりて居る。隠居金追  
つかきて。飢死寒死を。やうやくあにて居るふ。  
夫を何思ひぬ。不孝不孝此上ハ何るべからず。實  
子のどうらくハ。養子むすこよりハ大ひふ卫弓

實子ハ仕置始末り付がたし。世の親小ふんぎをやけ  
る子ふど。大罪ハ何るべからず。大聖釋尊の仰せ  
よハ。親の身上をあまう者ハ。母のひさの上へ小考  
もぐたきたる。實子のむす子なり。他人ハ指もさん  
事ありかど。又我法をつぶす者ハ。末世の惡僧也  
也。俗人ハそゑる也。見るくりふ也。つぶす事ハあり  
がたし。我法を滅する者ハ。末世の惡僧也と。  
仰せらきたり。尤至極也。孟子のいきく。城も身  
上も。内から家かづぶして。其後又他人が寄合てつ  
ぶすと。仰せらきたり。此通りふ相違なし。歌も

○かよりハ身もつけら色奴要害を。内からやぎテのいがが  
と。は歌よりもよく合点すべし。からを養子ハ已るいが。  
實子がよいとハ。一がいよいひがたし。こきよよりて。實  
子ふ身上を渡走も。養子ふ身上を渡すも。因縁次承  
時のよろあきふ。あたがふべし

○實子ハ我侵ふ者て。親のりふすを。一つもきかぬ若  
也。養子ハ義理を勘へるから。何より大無理ハせぬ  
者なり。實子ハ養子よりハ可ろし。實子ハ親のり  
すを。少一もきかぬ。實子ハ親のまふれまし。一家  
親類も。見て居るより。仕摸摸摸あし。川柳が発句小

○智恵のける。馬鹿<sup>わ</sup>よハ。祖父<sup>ぢ</sup>こまりをして  
○耳ハ馬<sup>ま</sup>つらハ。かわづよ。ちくこまり○此心を馬の耳  
ふ風<sup>かぜ</sup>かづのつらふ。水をかけるやうあれで。何かど  
異見をひふてぬ。少一もきかぬ。馬の耳ふ風あり。何か  
どいまあめても。かえづの顔<sup>お</sup>よみをかけこやう  
隠<sup>か</sup>くまド<sup>く</sup>と志て居る。ぶつても叩いても。仕方<sup>しほ</sup>あし。  
親父<sup>お</sup>も衣<sup>お</sup>も<sup>ふ</sup>も<sup>う</sup>き<sup>き</sup>。かへりて居ることをよんた  
発句也 ○雪の夜やふ孝老め<sup>め</sup>ぐおり所<sup>ところ</sup>○勤<sup>うん</sup>當<sup>どう</sup>の  
よより。こたつ小覗<sup>お</sup>かやせと。よそ一も皆<sup>ま</sup>實子<sup>じよ</sup>。親達<sup>お</sup>も<sup>う</sup>  
う苦勞<sup>くらう</sup>あて。夜も承<sup>よ</sup>ずふ。かあちんでいる事をよん

だる發句なり。かやうふ歌發句。いくらもありて。いひ尽こえ一がたし。是皆実子より出たる所の。昼夜の心勞あり。然らば養子ひざむるいが、実子じみこはよいと。一がいよ思おもべからず。又中あうちふハ實子じみこがありあからず。實子じみこハ家相續けいぞくが心元じんげんふいと見て。實子じみこハ少すくなく別家べつけをさせて。本家ほんけハ養子ひざむを貰もらひ。跡相續けいぞくをさせる人ひとも何なに。是等こきらハ余よかど。目水精めぢゅうせいの智者ちしゃの。心の寢ねと志しを人ひとであくてハ。此こ末すゑがたし。實子じみこり何なにを猶あとも。實子じみこがふくぞ。養子ひざむもよし。時のよそあきふあきふにて。家相續けいぞくのあるやう計そらふべし。家をつぶしてハ。

何なんもあらぬとあるへー。一切の苦勞くろうあるハ家を立たてんが為也。衣食住いきの三さんヶ身みが相應あうきょう小こあくてハ。其身みじんハ勿論もちろん妻子さいしけんぞくのあんぎいいんぎいんいん方ほうあし入間いんげんと志してハ。衣食住いきの三さんハあくてあらぬ者もの也。こきみよりて。家相續けいぞくが一大事だいじご也。實子じみこ養子ひざむ小こ限かぎらず。家の立行たちゆく工夫くわう大功だいこう也。養子ひざむる。法外ほうがいの無理むりどうらくどうらくいせぬ者もの也。たまくハ死しこる者もの何なに。王法おうがをきてハ死しこせば。隨まことにかく志して死しこるあり大おほひひ始はじ末すゑ付つけよー。實子じみこのどうらくハ。王法おうがをきて。毎強まいぢょう法外ほうがいの惡事おぞなを志しても。親おやみも恐おそきす。他人ほかみも耻はずす。

誰だよも遠とお裏うらもあく。金銀を差さひ捨て、身上じょうじやうを志たてま  
う者也。親おやよもあんぎおんぎをかけ、一家一門いっか いもん近付ちうづきよハ損そんをか  
け。已あらきもこもをかもり。雨あめよ濡ぬれる人とあり。子こハ  
三界さんがいの首くびかせといふハ。かやうかやうあ不孝ふこう不守ふしゅの実子  
養持ようぢたる。親の事也。養子むすこを三界さんがいの首くびかせ  
の沙汰さわぎあ。こきみよりて。一切の養父よぶ達たち。実子みのこを  
いかいよよいとハ思おもふべからず。何事なんごも因縁いんえんよ仕つかせ。  
時のよろきみ佐さがりて。家の治おさまり力ちからよいやう  
みすべ。又此身上じょうじやうを。他人ほかによやりて死死るハ。殘念ざんねんあ事ことも

や。此金を跡あとふ残のこあて死死るハ。殘念ざんねんあや。どふぞをひ  
て死死たいと泣なみて居ゐる人ひとを幾いく人も見見たり。是等ぜうハ  
愚癡ちむか文盲もんもうの入いあり。又佛の教きょうへをあらぬからからの  
事也。佛の教きょうへを聞きと。つまらぬ愚癡ちむかハ起おきさぬ者  
也。佛の教きょうへといふハ。若金銀財宝かなぎんざいぼうが何なにても死死る  
時ときハ。其やうふ執心しきじんある。執心しきじん志たても。死死る時ときハ  
死死る。執心しきじんせぬせぬとも。死死る時とき小死こ死する。小死こ死を執  
心しきか。又執心しきじんあて死死き。大ひおほ勝かつぐ。其上じょう小未こま未まハ  
善ぜん所ところ也。又執心しきじんあて死死き。大ひおほ小罪つみを作つく。未ま未まハ  
惡あく所ところ也。又金銀財宝かなぎんざいぼうを詰さえ置おきて死死るハ惜かい事

おや。生ひて死たいといふ人あり。是も祇ごを志ら  
ぬからして。左様さうよう思ふあり。何の所の金銀をつ  
くりて死ると。夫切き思ふ者て。福德が消へてあくある  
なり。生おらず不跡ふしき不残ふざんあて死しすきぞ。其福德ごふくが先さき  
の世よまと迄までも。魂たまひふくい付つて居ゐて。何國なま不生むな生なまても。福  
徳ふくが何なにる富貴ふきの家いえ不生むな也は若わ。生おひてあくを  
ききば。来き世せで福德ふくの生なまる種たねうあい友とも不<sup>ト</sup>来きハ貪  
乏ぶん入いりとある。たとひ佛ぶつとあつても。貧乏ひんぱうあて繁はん  
昌こうせぬ佛ぶつとある也は。先何まへハ鬼きも何なにき。金銀財宝を  
沢山たくさん不<sup>ト</sup>詰さまは残のこあて。跡あとの者ものがよろこぶやうふ人

であくてハ。よい人とひいひがたた。貧乏ひんぱうで死しんて。  
跡あとふ何なによもあくて。一家一門の世話せいわふあるやうふ事  
でハ。役やくふ立たつぬ人ひととあるべー。ろくあ追善ついぜんも生なま未まが  
たー。のりやうふ貧乏ひんぱう。厄やくか者ひとハ早く死しあきた  
ゲ。あ方あつかの仕合しあわせおやといきるやうでハ。一生いっせいのくら  
方かたハ。何よりよくあき人あきひととあるべー。何でも金銀財宝  
を跡あとふのここーー。跡あとの者もの一家親類いっけいりの悦えきぶやうふ人  
よありゑゑひ。さすきを追善ついぜん等とうも丁寧ていねいよあて。未ま  
來まくらの極樂往生ごくらくじょうじゆも目めふ見みへたる事こと也は。何ハ鬼きも何なにき  
金銀財宝を跡あとふ残のこあて死しすきぞ。其福德ごふくが魂たまひ

よくい付て居て。何國へ生きてても。富貴の家ふ生き  
て。福德自在也。併大名も生き。尊貴の家ふ生き  
ば衆ハ。皆金銀財宝を。人ふ施し奉ふよりてあり。  
外ふ子細あー。跡ふ残りて死るをよーと思ふべ  
キ。か候ふらぬあぞ。安心快樂此上あー。初めみの  
ふ通り。孰ん一て他人よ。やうともあいと。愚癡の忘  
念を起一ても。置て死ぬをあらぬ。忘念あー。孰心  
あく。心よく跡ふ置て死すべー。生て居る内ハ。此方  
のねあきぢ。死ぬを大事の此からださへ。捨て行か  
きを。其外の金銀財宝も。知行も。何そ惜まん惜ん

だとて。役ふ立ぬ事也。夫よりハ行先の後生こそ  
大事なきと。万事をあげうつて。仏念佛をヤー。笑  
ふくみて。死去者多ベー。是病中安心の法也。智  
者よく此道理を心ねて。一切無智の熟心深き人を。  
安心の方へ教へ導きゆふべー。是も大功德也。世間ふ  
金銀財宝ふ熟心あて。臨終又惡念をおこー。苦痛で  
んどうあひ。死一たる人を幾人も見たり。是金銀  
財宝を因縁する人ふ。渡す事、の徳ある事を。あらざ  
る故也。此道理を少くありぢ。あらせたく思ひて。  
重言多ー。拙ぐくちハ西るーゆひ

○善因善果。惡因惡果。毫末も遠ひあし。入ふ物を  
やきだ。又百千万倍もあつてかへる。人の物を取れ  
ぞ。何でもかども。百千万倍もあつて。やへさゆばあら  
ぬ。業因縁も恐ろあき考也。其いとをゆくや  
そふあらを。蛇蛻も食付きて。あんぎあたものハ  
蛇蛻を見ると。ぞりと考て。人よりよけのよ  
り。又火事で焼死んざ者ハ。火事を人よりよけのよ  
ち立がる。又跡の生で雷もおきて死一たる者ハ。今  
生で雷りをよけのよこハがる。是ハ何とあく。虫う嫌  
ふねよ。次あ一よ。入よりよけのよこをかる。是ハ天

然自然の道理也

○江州の山寺小白犬あり。おとあ志く一て。よい犬也  
此寺大晦日又例年も通り。餅をつき。本尊前和尚  
等の餅を取り。皆くたべた其跡みて。大ニ餅をくマ  
せたら。ぞふりの塙和ら。大の咽又引かりて。終ふ  
死一たり。是ハ仕方あ一とて。医經をよみ。穴をか  
埋めて。坐一。夫より十ヶ月も経ると。彼の白犬。和尚の  
夢も告ていきく。私ハおまへの所よかわきたる白  
犬あり。医經をよんて。葬りて下さきく故よ。其功  
徳よりて。人間ふ生を受け門番の子とす

一た。生きたら。おまへ換の弟子よあさき下され  
よと。告げき甚。和尚ハ誠の夢とハ思ひ至はず。是  
ハは方々河の犬ハ。何故小餅ちのど又つりへて死ん  
だらあらぬと。不便ふ思ひ一故よ。夫で夢ゆめ見と  
と見へると。心よもかけす。人よもかたらず志て其  
日も過て。又其晚さん又右の通りの夢を見たり是ハ  
唯事よも物るま。先門番の女房よみがへう懐妊くわいにんの有無  
を聞んと。朝早く聞きえ一けきを。門番の女房よみがへう  
懐妊くわいにんして。九月ここの月又あるといふ。こきよよつておの次  
弟おやぢを出なす。五六歳まご又もあつたら此方の弟子おれを

る間まつ先夫せん達たつハ其方そのよて。養育いくぐせよと約束やくそくあて、  
七しち又またあると。寺お寺へ引ひき取とりて手て習まをさせ。内うち徑きょうを  
教おへ玉たまひひども。外ほかの弟子おれ達たつよりハ。大おひひふ覺おわ  
ろら。愚鈍ぐどん又また内うちいたとの事。是ハ大おが人間じんげん又また生  
きまく故ゆゑ。愚鈍ぐどんと見みへたり。前世ぜいせいの余よ習ま。板  
此こ小僧こぞう餅もちがきついきらいあり。餅もちを見みせても  
遡さかくさかき志おもて。見る事こともきらいいとあり。是犬  
の時とき。餅もちを喉のどにつくつけて死死んしと故ゆゑ。ひどくひどくきらきら  
と見みへたり。爾そらハ火事ひごとでやけ死死んしど者ものハ。火事ひごと  
をよけいよけい怨おき。雷らい又また打うちきて死死んしど者ものハ。雷らいを

余計よほふ忌ちまう一いかる。是も因縁いんえんの起おきる事ことと見へたり。然ならを金銀財宝衣類等ざへぢゅういり等のも、且よぐあくあて死しきすきだ。夫おれ切きるて。福德ふくとくハあくある。人ひとよやつて死しきすきば。何國いつくに迄まも魂たまひよくい付ふて居ゐて、生うき出でたる所ところへ。福德ふくとくが正まさき出でて。福人ふくじんとあるナリ。夫おれ故ゆゑよたる正まさけでも。金銀の有ある人ひとあり。是も跡あとの生うで人ひとよやり。又ハ跡あとのここーて死しきーたる故ゆゑの事こと也。又何程利根りこんても。貪ばら乏ひれる人ひとあり。是も跡あとの生うで施あらわーをせず。人の物ものをかりてかへさず。人ひとよ損そんをかけたる人ひとあり。其報むくわひが来て。貪ばら乏ひれる也。又智

惠えもあく藝能げいのうもあくてもよい家いえよ居ゐり。金銀きんぎんを持もて。福祐ふくゆよくらす人ひとあり。是も跡あとの生うで人ひとふ施あらわーをあたり。人ひとよ損そんをかけざる所ところの果報ごうほうのあらひあらひあり。世間よのまを見て。此道理ぢろいる事をよくあるべ。此理ぢろいを以もちて押時おせときハ。此身上じゆじようハ他人ほかひとよやるハ惜かい。此金銀きんぎんハ何所どこ迄まもおきら物ものあらと。孰心おもんをるハ心こころのせまい故ゆゑ也。いつき人ひとよやきを。又歸かへり来る。又無理むりよ人の物ものを取ときた。又万まんをいまあて取とかへざる、又相遣さうけん係ひー。原宿はらじゅくの馬ま。河内かわちの國くにゆげの馬まの因縁いんえんよてよくあるべ。又歌うた

○先の世でかゝたとゆく。今かすう。いつき因果の報ハぬはゆ  
と此哥のごとト。天道ハ其差引勘定より少一も弓遠  
ふ。いつき善惡の差引み所カベ。是よりつて家業  
を生精一。おごらぬやうよろて。金銀をため死る時  
は。其金銀を子孫へ残志て死すべ。さすまぞ  
其陰徳也。其人の神志のよろい付て居て。何國へ生  
きてても。福德安心の人とあるあり。此道理あきそ。  
跡へのこちて死する事を決一て惜むべからず。悔  
むべからず。實子でも。養子でも。因縁有る人よづ  
て死すべ。己きハ唯一心よ念佛を唱へて極樂往

生を願ひべ。かやうよ了簡を定めたる人を。上の  
智者といふ。此世を塩梅よく暮し。未來ハ成佛を  
る人あり。此上の仕合ハ有るべからず。又其財寶を  
也づり受た者ハ。其人の追善をよく致し。其人の  
為よ善事をあて。大恩を送るべ。又もづり受た  
財宝を大切よみて。又子孫へ也づるやうよすべ。さ  
すきを死去せ一人ハ。いやうかり脱ひゆあらん。跡  
も残りたる人ハ。先死の人の志一を無よせぬやう  
みすべ

○生色ふ。時ふ衣もきざうけり。本の裸むだりも成あつてかへらん  
○始末よくふんどまーあめて金持かなもちて生きうまこ考かのハ一人ひとりもほ。  
誰なまきでも金銀財宝田地知行衣服道具等いゆくどうぐを持もて。生  
きた者まことハ一人ひとりもあまー。一切の人の手て本もとハ。釈迦しやか如來よみよ  
四月八日六丸まるをくわなり。皆ますあり裸むだりて生うまきた  
る。尔らまハ死しる時ふハ。皆ま何なにも置おて行ゆかませな  
ぬ苦くるとあるべまー。此道理よ異儀いぎのべからず。皆ま黙まり  
て信受うけよをべまー。いづきの養父母うぶ達たまつも。實子じしもやら  
ず。あて。他人ほか人ひともやると。大おひあ悲かなれ。此身上じじょうを他人ほか  
もやる。惜かい事ことがやと思おもふ。臨終りんぢゆうの時ふハ。尚まだ執心しきんある。

夫故ゆゑふ極樂ごくらくへ往こう生うを仕つかてこあま者もの多多く。愚鈍ぐどん無智むち  
ととつとべまー。尔きまども金銀財宝知行等いゆくよ執心しきんを  
一いつて。迷まハむまととの事ことも何なにききども。又女めの杯さかハ著物きもの  
ふ執着しきちよおて迷まふ人ひとあり。是又あまままーき事ことなし。  
あきやうよすべまー

○江戸芝神明町しばしんめいより簞屋だんやあり。其近所きんしょの女めの、美眼びがんを質あ  
入いきて受出うしゆさまして。死去きよ歿めーたり。其後のち毎夜まいや  
其女めの来きりて。右の著物きものを求めむ。此女めのハ此比死このひーたる。相違あふまー。然しかむ著物きものを求めぬ来る。苦くあまーと主入しゆりん  
何なにやあく思おもひて戸との透とおるよりのぞき見みきを。質あ

を置たる女ふ相違ふ。是ハ定めて。幽靈あらん。  
かの着物小執念が残りて来ると見へ。忍ろあ  
く思ひて。戸を開き。かの着物を投出しつゝハリ。  
る。幽靈悦びて持行を。伴頭心ねず思ひも。一や狹  
子をあらだる人の感ハす事もあらんかと。跡づき  
行し。ある寺に入りぬ。あをついてゆく。墓所も  
行て消失たり。身の毛もよだちて。忍ろあく思ひ寺  
を起きて。僧を伴ひ墓所へもきて更きぞ。其女の墓  
あり。着物ハ其傍墓の上よりけり。其後此質屋の亭  
主思ひけるハ。あち商賣ハ人の執念かる者あらず。

よろ一からずと。家業を改めけるとあり。是ハ辺  
の事也。私よいとく。質又置たる物あきぞ。已き  
勝手みて。ふくあたる者あきぞ。あち至又料か。  
是ハ迷ふ人のあやまつあり。夫も存生の内あらぞ。  
執心するも尤もき。死んでからハ。何又死る者若  
や。普てあるいて。入よも見せるといふもあらず。唯已  
きが愚癡より。執念を起し。悪を作り。我が魂ひをそ  
こあふといふ者也。益々も立ぬ事。我身を地獄へ落  
すといふ者也。此上の不覺ハ何るべからず。左挾み事よ  
執心するよりハ。未來善所の支度を走きをよい。身

の無<sup>ム</sup>なる事ハせず。身の仇<sup>ア</sup>とある事をかり  
を走る。人間の智惠<sup>チホ</sup>ふしもてまる。此女<sup>ム</sup>限<sup>キ</sup>らば。  
誰<sup>タリ</sup>でも益<sup>ヤ</sup>も立<sup>タ</sup>ぬ事<sup>ス</sup>。執心<sup>ヲ</sup>あて。惡<sup>ヲ</sup>作りて。地獄  
へ落<sup>カ</sup>るなり。こき又よりて智ある人<sup>ハ</sup>執心<sup>ヲ</sup>あても役  
ニ立<sup>ナ</sup>ぬ事<sup>ハ</sup>變<sup>ハ</sup>て執心<sup>ヲ</sup>せらす存<sup>シ</sup>の内<sup>ハ</sup>。達者<sup>亦</sup>内  
より。我<sup>キ</sup>余終<sup>メ</sup>の時<sup>ハ</sup>何<sup>タ</sup>のけつかう<sup>ハ</sup>寶<sup>ミ</sup>も。變<sup>ハ</sup>て  
執心<sup>セ</sup>ま<sup>イ</sup>と。心<sup>ヲ</sup>定<sup>メ</sup>置<sup>ベ</sup>。何<sup>タ</sup>後生善所<sup>ノ</sup>の心  
内<sup>ノ</sup>第一也。是より外<sup>ヨ</sup>よい手段<sup>ヲ</sup>あ<sup>ハ</sup>。一切の人別<sup>ア</sup>て  
女入<sup>ハ</sup>。此道理をよく心ねて。存<sup>シ</sup>の内<sup>ハ</sup>。我物<sup>ア</sup>き  
哉。死<sup>ス</sup>きを入<sup>ス</sup>の物<sup>ミ</sup>とするハ。此考<sup>ヤ</sup>をの活定法<sup>ア</sup>

此道理をよくあ<sup>リ</sup>て。千万両の宝<sup>ミ</sup>も少<sup>ト</sup>も執  
心<sup>ス</sup>べからず。急度<sup>心</sup>に<sup>シ</sup>。

(○) 豊州<sup>サザキ</sup>衆<sup>ス</sup>の城下<sup>ヨ</sup>。一向宗<sup>ノ</sup>の寺<sup>ア</sup>り。其擅<sup>シ</sup>家の娘  
めある日<sup>、</sup>寺参<sup>リ</sup>せ<sup>ー</sup>よ。當世風<sup>ノ</sup>の色よき衣服<sup>ヲ</sup>と着て  
来<sup>リ</sup>け<sup>シ</sup>。其寺の妻<sup>女</sup>見事<sup>の</sup>よ<sup>ー</sup>かめ<sup>ケ</sup>き<sup>ヲ</sup>。是  
ハ京<sup>キ</sup>染<sup>ム</sup>てあつらへあき<sup>を</sup>容易<sup>イ</sup>小<sup>シ</sup>求めかた<sup>ー</sup>と呴  
一<sup>け</sup>り。其後<sup>、</sup>其娘<sup>病</sup>死<sup>セ</sup>り。寺の妻<sup>女</sup>ハ心<sup>ス</sup>よろ<sup>ゴ</sup>び  
右の著<sup>物</sup>を<sup>、</sup>寺へ<sup>取</sup>むべーと思ひ居た<sup>リ</sup>。餘<sup>の</sup>著  
類<sup>を</sup>收<sup>め</sup>け<sup>キ</sup>。かの妻<sup>大</sup>ひよ本意<sup>ア</sup>く思ひ。其事  
をいひ送<sup>リ</sup>けるやう。先達<sup>テ</sup>娘<sup>の</sup>著<sup>て</sup>余<sup>ら</sup>き<sup>一</sup>衣類

ハいとあききの外と。たづねけを。其親ナーネけるハ  
右着物ハ娘が報心せ一品あきだ。着せて、葬りーと  
りふ。寺の妻是を聞いて力を落し。本意あく思ひ。何  
より熱心あて。夜中は其墓所へゆきて。ありかへ。亡  
者又着せたる着物をえぎとり。かへらんとせる所を。  
其亡者忽ち首をのぞー。其女の裾をありやとくせ  
へたり。是よおどろいて。女の事なさむ。氣絶せり。寺よ  
てハ妻女が夜更て居らぬ故に尋ね歩行者。彼の墓  
の本とく。倒き居たり。住持こきを見て。大ひよおと  
ろき。碧身あるひ。恐ろあく思ひ。女の身と見て。夜中よ

新亡の墓所を掘かへす。杯ハ男も叶エぬ。大膽不敵あり  
カハ表ハやさしく見えても。内心ハふとき者あり。外面  
如菩薩。内心如夜叉と説きひー。相違あー。誠よ女ハ  
輪廻のきづあと示し。事。今更思ひ當り  
と。其夜其寺を出て。清僧とあり。德行の高き人とあ  
り。多ひーとあり。私云此妻女も。大ひふる愚鈍者也。  
寺参りの娘。當世風のよき衣裳を著て来た時よ  
ハ誠ようつく。よい衣服あきせ。死がいよきせて。  
墓所へ埋てハ。泥又まがき。できよりもおどりあり。尔  
るよ娘が著て来た時よハ。うつくーかつたとて。墓所

よりあり生なまりて。又用ひやうと思ふ。あまりあきら  
うといふべし。此女又限らず。一切人のする事ハ。皆此く  
らゐの者也。よく勘かんへて見きば。正きが何あう。正き  
あきかる又ね遠とおふ。執著心じゆくじんよハ。かやうあ何なにやま  
り何なに。此事をよくありて。一切の事ニ。執著心じゆくじんあき  
らめすべし。執著心ハ偏僻へんきあきを。一切あやまつての事  
とあるべし。こきよよつて。何事ニも執心じゆくじんあく。心を  
ひろく。清淨きよせいニ持もべト

口用心法鈔五編隨筆中 終

